

日常生活史 — J氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」(その十)

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91・97・98・99・101・103・105・107・108輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

今回利用した、当該資料は、1980年3月25日10時より14時まで、J氏のブラウンシュヴァイクの自宅でインタビューした内容を、A4タイプ用紙102ページに書き起こしたものである。インタビューの途中でJ夫人が帰宅し、インタビューに加わったので、J夫人の発言内容も掲載した。

ここで、参考のため、まず、J氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

1914年3月30日	ブラウンシュヴァイクで誕生
1928年より	ビュッシング社で旋盤工
1932年4月～8月	失業
1924年より	職人協会（体操協会）会員
1928年～1933年	ドイツ金属労働者同盟組合員
1939年12月9日	工場労働者と結婚

父：1877年にフォアヴォーレで誕生、1917年に西部戦線で戦死

職業は、1891年～1911年まで農業労働者、1911年～1914年まで金属労働者

継父：1865年にヘルムシュテットのハルプケで誕生、1951年にブラウンシュヴァイクで死亡、職業は庭師、1910年～1930年までビュッシング社の旋盤工、ヒルシュ・ドゥンカーシェン職人協会会員

母：1884年にフォアヴォーレで誕生、1953年にブラウンシュヴァイクで死亡、職業は、1898年～1911年までホルツミンデンで家事手伝い、1918年～1927年まで洗濯婦、1927年より掃除婦、未組織、出産は5回

1. 両親について

私の実父は、1877年4月24日か25日にホルツミンデン *Holzminen* 近郊のフォアヴォーレ *Vorwohle* で生まれて、ブラウンシュヴァイク *Braunschweig* には1911年にやって来ました。父は新教に属していて、教会から脱退はしていません。父の職業は、農業労働者と言えましょう。なぜかという、祖父母は居酒屋と農家を経営していて、4人の息子がいたのですが、父は、そのどちらかを相続することになっていたのです。しかし、相続する前に戦死してしまいました。それで私たちは、その分を後にお金でもらいました。私が21歳の時でした。しかし、インフレの時期で、そのお金で何か商売を始めるなんてことはできませんでした。そのお金で買える物なんて、バター付きパンくらいのものでした。

父はフォアヴォーレで普通に学校へ行きました。彼が学校を出たのは14歳の時です。私が生まれた時は、父は農業労働者でした。1911年にブラウンシュヴァイクに越してくるまでは農業労働者だったのです。父はフォアヴォーレでは、祖父母の経営する農家で農業労働者として働いていましたが、よそで働いたことはありません。最初は農業労働者でしたが、このブラウンシュヴァイクへ出てきて、MIAG社へ行行って、働きました。父がMIAG社でどんな仕事をしていたのかは知りませんが、MIAG社の労働者だったことは確かです。つまり、工場労働者でした。ブラウンシュヴァイクではMIAG社でしか働いて

いません。当時は、アンメ・ギーゼッケ&コーネゲン *Amme, Giesecke & Konegen* と呼ばれていた会社です。そこで1911年から1914年まで働いていたのです。その後は兵隊でした。父の兵隊としての位については知りません。父は、1914年の総動員がかかった日から2、3日目に徴兵されて2年間、軍隊にいたのです。彼は、シュトラースブルクで兵役に就いていました。大砲の横に座っていたのですよ。父は徴兵されて、それが彼の死につながったということです。父たちは陣地へ行く途中に、弾に当たってしまったのです。当時は、移動はすべて馬に頼っていたのですが、移動の途中で、馬の尻に当たった榴弾の破片を受けて、それがもとで亡くなったのです。

父が失業していた時期はありませんでした。

私の実父は、私の母とはじめての結婚をしました。私生児はいませんでした。彼は私生児として生まれたわけでもありません。

両親が結婚したのは、1907年です。月日はわかりませんが、フォアヴォーレの教会で結婚したということです。

母は、1884年2月29日に生まれたので、4年に一度しか誕生日を迎えられませんでした。結核を患って、1953年6月29日にブラウンシュヴァイクで亡くなりました。母も、ヴェーザー河畔 *Weser* ホルツミンデン近郊のフォアヴォーレで誕生しました。学校は、国民学校へ行きました。そして、私の父と一緒に1911年にブラウンシュヴァイクへ出てきたのです。母は新教に属していました。教会から脱退はしていません。

母は職業教育を受けておらず、ホルツミンデンで個人の家の家事手伝いをしていました。ブラウンシュヴァイクでは洗濯婦や事務所の掃除婦などをしていました。ホルツミンデンでは、建設監督官のフェッダー家 *Vedder* で家事手伝いとして働いていたのですが、まだ結婚前でした。母は、1898年に14歳でホルツミンデンのこの勤め先に働きに出て、ここが彼女の唯一の勤め先で、ブラウンシュヴァイクへ父と出て来るまでは、1911年までずっと働いていま

した。

ブラウンシュヴァイクへ来てからは、子供を産んだので、働いていません。彼女は5人の子供を産みました。だから、主婦として家にいただけなのです。父は1917年、私が3歳の時、正確には3歳半の時に戦死しました。私のすぐ上の兄は私より4つ年上で、もう学校に行っていました。私はまだ家にいました。それから1年後だったと思いますが、私が4歳半の時、1918年から母は洗濯婦として働き始めました。1920年から27年までは、パン屋やレックベッケ銀行 *Löbbecke* のような少し金持ちの家で洗濯婦として働いたのです。1927年から1950年までの23年間は、弁護士事務所でも事務所の掃除婦をしていたのです。その弁護士は、メトゲ *Müdge* という名前でした。この掃除婦というのは、当時の言い方で、今でいう家事手伝いです。母が失業していたことはありません。

母は、父との結婚前には誰とも結婚していたことはありませんが、結婚前に一番上の兄を産んでいます。しかし、その後父と結婚したのです。つまり、子供ができたから両親は結婚したのです。私の長兄は、1906年の11月24日に生まれました。もちろん、私の父が父親です。当時、父は兵隊でした。昔は私生児の親は援助を受けることができなかったので、兵期が終わってから結婚したのです。母は、死産は経験していません。母は私生児として生まれてもいません。政党などにも入っていませんでした。彼女の最初の結婚生活は父の戦死によって終わりました。

父の死後、母は働かなくてはなりませんでしたが、もちろん、昔は何の援助があったというのでしょうか。5人の子供がいたというのに、わずかな寡婦年金と孤児年金じゃあ暮らしていきませんでした。そんな事情から母は1919年10月に再婚したのです。

私の継父は、1865年3月24日に誕生しました。彼は母より19歳も年上でした。ヘルムシュテット *Helmstedt* の近くのハルプケ *Harbke* で生まれています。発電所のあるハルプケです。この継父が、いつブラウンシュヴァイク

に出てきたのかはわかりませんが、多分、徴兵された時だと思います。彼は槍騎兵隊か軽騎兵隊のどちらかにいたのですが、1914年の戦争の時もう除隊していました。

継父も宗教は新教でしたし、教会から脱退もしていません。彼の父親は庭師だったのですが、自分の相続分をもらい損ないました。継父自身も庭師だったのですが、軍隊を除隊してブラウンシュヴァイクに来たときに、職業を変えて、ビュッシング社 *Büssing* で旋盤工として働いたのです。しかし、正式の職業教育を受けていたわけではありません。だから、ただの習熟工として働きました。彼は、ハルプケで庭師の職業教育を受けて、働いていたのですが、いつ頃のことなのか、その時期も、またどんな親方の元で修行したのかも知りません。学校は国民学校でした。ビュッシング社で働き始めたのは、1912年だったと思いますが、1930年に65歳で仕事をやめるまで、ほぼ20年間、ビュッシング社で働いていたわけです。つまり、会社を替わることもなく、ずっと20年間、ビュッシング社で働いて、3月に65歳になるやいなや家に帰されたというわけです。彼は失業していたことはありません。

継父は私の母と再婚する前に、一度ですが、結婚していました。一度だけです。妻が亡くなったために最初の結婚生活が終わったのです。私の母とは1919年に結婚したのですが、彼の最初の妻が亡くなって1年か一年半後だったそうです。継父に私生児はいません。継父自身も私生児ではありませんでした。

彼は、最初の結婚では、5人の子供をもうけています。男の子を2人と女の子を3人です。彼らがいつ生まれたのかは、全然わかりません。一人は戦死しましたし、もう一人の男の子は、この *MIAG* 社で組立工をしていて、たしか82歳で亡くなりました。そんな年になるまで生きていたのですよ。彼らと一緒に暮らしたことはありません。彼らはもうみんな家を出ていました。

私の母と継父がいつ結婚したのか、はっきりとは覚えていませんが、1919年の10月だったということです。場所はブラウンシュヴァイクでした。彼らは教会では結婚式をしていませんし、結婚前に婚約もしていません。

彼らがどのようにして知り合ったのかはわかりませんが、ブラウンシュヴァイクで知り合ったのです。父が亡くなる前に知り合っていたということはありません。私がひとつだけ知っていることは、彼らが知り合ったのは戦争後だということです。私が5歳の時には、彼らはもう一緒になっていました。だから彼らが知り合ってから結婚するまで、そんなに長くはありませんでした。

継父は、労働組合に加入していました。ブラウンシュヴァイクの、昔は、ヒルシュ・ドゥンカーシェと言っていた労働協会です。いつヒルシュ・ドゥンカーシェに入ったのかは知りません。ずっと脱退はしていません。この組合は、組合員が亡くなると、お金を集めて、その遺族が受け取る仕組みになっていましたが、いつ何処でどのようにして彼が加入したのかはわかりません。その他には、彼は政党やスポーツ協会や合唱教会、演劇協会等には一切、入ってはいませんでした。正しくはヒルシュ・ドゥンカーシェ労働協会 *Hirsch-Dünkersche Gewerksverein* という名称でしたが、これにだけ加入していました。この継父は、1951年の3月にブラウンシュヴァイクで亡くなりました。老衰で、86歳で亡くなったのです。

小さい頃は、母親がなんでも子供の面倒を見るものですから、私は継父よりも、もちろん母の方が良い関係でした。継父は私に対して不当なことはしませんでした。私は彼に一度として殴られたりしたことはありません。兄姉中で、継父とは私が一番仲が良かったのですよ。私が少し大きくなってからのことですが、彼の様子がおかしくなって、誰も彼と話すことができなくなることがありました。そういう時には、私だけが、かろうじて彼に話しかけることができました。兄には話しかけることさえも許さなかったのです。話しかけたりしようものなら、猫のように兄に飛びかかっていったことでしょう。家に帰ってくると、すぐに気が付いたものです。私の母が台所で食事の支度をしていて、彼は窓のそばの籐いすに座っています。そこで私が「一体、また何が起きているの？」と言うと、母が「彼がまた今日、兵隊時代

の悪夢を見ているのよ」と言うのです。こういう事が起こるのは、毎回、私たちが何か新しく物を買わなければならない時で、たとえば一足の靴などですが、彼はバリケードの中にこもってしまうのでした。お金がなかったからなのですが、それにしても、そんなことをしなくともよいものと思ったものです。

J夫人：継父は、ほんとうに「自分中心の人間」でした。例えば、私がこの家に来たとき、夫が言ったものです。「彼の最初の妻が悪かったのだ」とね。もう、その前に私の夫は、私に「まあ、親父が自分にいつも一番小さな肉があてがわれたと言っても気にするなよ」と言ったものですよ。つまり、姑が肉を取り分けると、義父はまず自分が稼ぎ手であることを主張するのです。だから、最初の結婚生活では、まず彼がお腹いっぱい食べた後になって初めて、妻が子供たちと食べたのです。つまり、そういう風にして、最初の妻は、彼を甘やかしたのです。彼には3人の子供がいたのですが、その子供たちが、みんな結核で亡くなり、彼の妻も結核で亡くなったのです。それでも彼はちっとも動じませんでした。私の知人が後に語ってくれたので、知ったのですが、彼女はいつもこう言っていました。「子供の一人がソファーに座っているときに、父親が家に帰ってくると、どの子も、戦々恐々としてあっという間にソファーから立ち退くよ。」ソファーが彼の席なの。その女性は、日曜日に、よく私たちの家に来てソファーに座ったのですが、ある時、舅が「ソファーに座りたい」と言うと、「あなたも座れるけれど、今は私が座っているのよ」と彼女は言って、舅に席をゆずることも、家に帰ろうともしませんでした。でも、後には、彼は変わらざるをえなかったのです。つまり、またもや姑にも5人の子供がいて、彼はそれに慣れなければならなかったからです。というのも、姑が「いいこと、私とは、前の奥さんのようなわけにはいかないのよ。とんでもないわ」と言ったのです。私の夫がいつも話してくれましたが、二人は結婚し、舅は姑に15マルクをテーブルの上に置いて渡し、それから「これで足りなければ、自分で稼げよ」と言ったのです。それで姑は、「いいかげんにしてよ。そんな風にするは思わなかったわ。あなただって私がそんなこ

とを承知しないとわかっているでしょうに」と言ったのです。それまでに、すでに2人の子供は親戚のもとにいたから、家にいる子供は3人だけで、ヒルデ *Hilde* も仕事に就いたので、実際には家に子供は2人しかいなかったのです。そこで、姑は「いいこと、あなたは私と結婚したのよ。だからお金を要求するわ」と言ったものです。そこで彼女は、皮付きジャガイモの塩煮を出したのです。それに対して、舅が「なんだ、また肉なしか？」と言うと、「そうよ、15マルクだけじゃあ、こんなものよ。私だって何か食べなくちゃあならないのだから」と、舅がお金を出すのに慣れるまで言い続けたのです。それはもう、簡単なことではありませんでした。夫をそれほどまでに甘やかすものではありませんよ。私と夫の場合は、この点に関しては舅と問題なくいきました。というのも、舅は1930年にはもう年金生活者になって、56マルクの年金を受け、その中からわずかですが、ボヘミア緊急政令によって引かれていただけでしたから。私の夫は半年間だけ失業していましたが、舅がお金を稼ぎ、夫が石炭やジャガイモなどの不足している物を手に入れてきました。こうして、私の夫は、他の兄弟よりも舅とうまくやることができたのです。そういう状況の時に、他の兄弟たちがいつも来ては、飲み食いしていきました。彼らと私の夫とは、それはもちろん違いますよ。私の夫と継父は、お互いに好感をもっていたので、私たち家族、つまり私の息子や私にも良くしてくれました。なぜかというと、舅は、他の子供たちや、その連れ合いや子供たちには、何かをしてあげるといことがなかったのにですが、私たちの息子には、たんすの引き出しからリンゴをひとつ持ってきて、与えたりしたのです。まだ虫除けのにおいがするにしても、彼は私の息子に与えるりんごは持っていたのです。

2. 兄弟たちについて

あるエピソードをお話ししましょう。私たちの家の前にパン屋がありました。昔は、家でケーキを焼いたものです。母はすばらしくおいしい砂糖ま

ぶしケーキを焼いたものです。私たちは、このケーキが大好きでした。ある時、母が2個のケーキを焼きました。私より4歳上の兄は大食らいで、あっという間に食べ物を飲み込んでしまったものです。昔はよく、私がまだ食べてもいない物を、彼が食べてしまって、皿を空にしてしまったものです。彼は何でもあっという間に飲み込んでしまうのです。彼が夜中の1時に家に帰ってきます。ケーキがあります。すると、彼はケーキの半分を食べきってしまうのです。母は、朝になって、父が起きてくる前に叫び声を出すのを押さえることができません。そこで母は、残っているケーキをみんな、大急ぎで切って、皿の上に並べるのです。彼は本当に考えられないほど、何でも飲み込んでしまう大食らいでした。

私には、2人の兄と2人の姉がいました。長兄はエーリッヒ *Erich* という名前です。私たちは、次兄をハイニー *Heini* と呼んでいましたが、本当の名前はハインリッヒ *Heinrich* です。私たちは、彼を普段はハイニーと呼んでいました。長兄は1906年11月24日にフォアヴォーレで誕生しました。ハイニーは、1910年8月24日にブラウンシュヴァイクで誕生しています。長姉は1908年の9月19日にフォアヴォーレで、次姉が1912年8月22日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。だから、私は末っ子です。長姉はヒルデ、次姉はリスベート *Lisbeth* という名前です。

父親違いの弟妹はいません。継父の子供たちがいるだけです。だから、母の2回目の結婚で生まれた弟妹はいません。兄たちはまだみな生きています。私のすぐ上の、1912年に生まれた次姉のリスベートが、3カ月ほど前に、正確には、1979年に亡くなりました。ヒルデはまだ生きています。

J夫人：ハインリッヒは1924年に指物師の仕事を始めました。姉たちの職業は、家事使用人です。ヒルデは2年間、家事使用人として勤めた後に、鉄柵製造工場のグリム社 *Grimm* で仕事を始めて、結婚するまで働きました。どちらの仕事先もブラウンシュヴァイクでした。

ヒルデが結婚したのは、1930年でした。リスベートは、最初はブラウンシュヴァイクで家事使用人として仕事につきましたが、何年くらい働いていたの

かは、わかりません。その後、ハノーファーに移って、結婚するまで家事使用人として仕事をしていました。彼女は、学校を出て、1926年に仕事を始めたのだと思います。

J氏：エーリッヒとハインリッヒの妻たちは、主婦ですが、エーリッヒの妻も結婚前は家事使用人でした。ハインリッヒの妻は、結婚前に、偶然、二人一緒に街で出会い、紹介された時には、両親の家に住んでいました。

ヒルデの夫は指物師でした。リスバートの夫のオスカー *Oskar* はトラック運転手でした。あの有名なハノーファーの老舗のベーテ輸送会社 *Spedition Beete* でトラックの運転手をしていました。何度か彼の車に乗って、ハノーファーまで行ったことがあります。

ベーテ輸送会社は、ハノーファー、ハンブルクの自由港、下のライン地方に至るまで営業所がありました。ある時は、ライン地方の皮加工工場まで一緒に乗せていってもらったり、彼が行くところどこにでも乗せていってくれました。その当時、私たちの息子がもう生まれていました。それで私たちは、みんなで一緒に乗っていったのですよ。昔は、寝るためのキャビン付きのトラックがありました。そういう機会に、息子にハンブルクを見せました。朝早くに到着するために、いつも夜に出発しました。そうして自由港に乗り入れたものです。コーヒー豆ですよ。荷を積み込んで、彼はまた車を走らせませす。積み込むと、彼は、もうゆっくりと戻ってくればよいだけで、早く到着しようと焦ることもないのです。ハノーファーにいようが、ハノーファーを通り過ぎようが、心配する必要がないのです。彼は書類を受け取り、ガソリンを入れ、荷は積まれているし、そうすると24時間何もしなくともよかったです。昔の運転手というものは、正直に言いますが、彼らは悪い手をふたつもっていたのです。例を挙げると、昔は、コーヒー豆は焙煎されておらず、100 kgの袋に入っていたものですが、オスカーは、自由港で、それをわざと荷台から落とします。そうすると、袋は破れます。彼らは自分用の袋を持っているのです。私の姉はコーヒー豆を買ったことがありません。彼は、知り合いの家の並ぶ道路を通るとき、夜の1時に知り合いの家の窓をノックしま

す。そうして、卵やその他の彼がほしい物をもらうのです。彼は、時には皮製品などでも、そういうことをしていました。シュトゥッツガルトからの靴をみんなに一足ずつ配ったりもしました。

今どきの運転手はそんなことはできません。昔はそういう風に走って、何時間走ったか申告したのです。だから、まず右の横道にそれて走っていたものですが、そうでもなければ、戻るのが早すぎましたからね。ある者は、あちらの方向へ走っていき、またある者は時間を引き延ばしたのです。

私の兄姉で離婚した者はいません。私の兄姉には私生児もおりません。私が一番仲良くしていたのは、昔は長兄でした。しかし、その後、この長兄のエーリッヒが家に来て、いつも、私のもう一人の兄をさして、「あそこを見ろよ。お前の友だちがまた来たぞ」と言うのです。そこで私は、「おい、あれは僕の兄さんであると同様にお前の弟だよ」と言ったものです。今では、長兄とは、もうまったく仲良くはできません。なぜかという、彼は図々しい奴だったからなのです。私たちは当時、両親の家で同じ部屋を一緒に使っていました。私の物か、彼の物かがはっきりとはしていない物があると、彼がそれを身に着けました。気分の良いことではありません。しかし、その後、私は彼よりも力が強く、背も大きくなりました。そうすると、私の手が届く範囲も広がったので、彼の体のあちこちを攻撃して、私の一撃はいつもうまく当たりました。私がすてきな室内履きを買うと、彼がそれをすぐに履いているので、「友だちよ、僕は自分用にすてきな室内履きを買ったのだけれど、お前がそれを履いている。僕はもう一度、同じのを一足買うよ。もし、またそれを履いたりしたら、お前の頭をひどく殴ってやるから」と言ってやったものです。しかも、私の母は、余分な仕事をしなければなりません。というも、彼女は、私たちのソックスのすべてに、私たちそれぞれの名前を縫いつけなければならなかったからです。そうでもしなければ、この兄にとっては、自分のも次兄のも、どれでも同じように履いてしまったからです。しかし、私たちは、昔は、離れられないほど強い絆で結ばれていたのですが

ねえ。

もちろん、今話しているのは、エーリッヒとのことです。それが、私の母の死によって、関係が変わったのです。私は事故に遭ってしまい、母の死に目に会えませんでした。母は、亡くなる前に、私ともう一度、話をしたがっていたのですが、当時、私はアキレス腱を切って、病院に入院していました。私はその数年間ずっと母の面倒を見てきたのに、会えなかったのです。病院へ私の姉が来ました。「もう来たの？」と私は言いました。ちょうど回診の時間だったので、彼女は病室の外に出なければなりません。それで、私は医者に「ドクター、こうこう、こういう次第です」と言うと、医者は「わかりました。看護婦さん、Jさんに松葉杖を用意して下さい。警告しておきますが、足で地面を蹴ったりしないようにしてください。そんなことをしたら、あなたの脚は良くなりません。」と言いました。病院にはすべての設備が揃っていて、私は6週間というもの、脚を上から吊された形で固定されて、寝ていたのです。私はどうやって電車に乗ったのか覚えていないのですが、誰かに中へ引き上げられて、また引き出されたのです。そうこうして、この家にやってきました。私の息子がやってきて、「お父ちゃん、お母ちゃんは美容院に行ったよ」と言うのです。ということは、葬式だということで、「私もいろいろ用事をしなければならぬのだよ」と言いました。私の兄姉たちは、全てを私の妻に押しつけるつもりだったのです。彼女が署名したり、その他の事もすべてをするべきだとね。

私の義兄は1930年代に5年間、失業していました。それに私の次兄のハインリッヒも同じくらい長い期間、失業していました。

3. 祖父母と叔父たちについて

祖父母が何歳まで生きていたのかは知りません。母方の祖父は、多分、84歳まで生きていました。牛に踏まれて亡くなった祖母は、若くして亡くなりました。30年代に40前で亡くなってしまったのです。父方の祖父母のことは

知りません。

どちらの祖父母もブラウンシュヴァイクで暮らしたことはありません。父方の叔父たちはブラウンシュヴァイクで暮らしました。父の父親はフォアヴォーレに住んでいました。私の両親の親たちは、みな、フォアヴォーレに住んでいましたが、父方の祖父のみ、クライエンゼン *Kreiensen* で生まれたのです。彼は、クライエンゼンの鉄道で働いていて、昔はよくそういうことをやっていたのですが、そのかたわらで農業と居酒屋をやっていたのです。鉄道といっても、公務員ではなくて、ただの鉄道労働者でした。祖母はただの主婦でした。母方の祖父は道路工夫でした。道路に座りこんで、石を打ち込んでいくのです。彼は2mの長さの竿を持っていて、それでもって石を打ち込みおえた道路の長さを計るのです。

母方の祖父母の家の前には、コンクリートのプラットフォームがありました。そこが村の出入り口なのですが、ここから村へ下っていく線路がのびていたのです。いつも私がそこへ行くと、私は、よその家の子供たちと一緒に村の学校へ行きました。ここは楽しかったです。祖父の最初の妻は、3人の子供を産みました。そして祖父の2番目の妻は、さらに2人産んで、3人目の妻も2人産みました。

父方の祖父は、すでに話したように、ここで居酒屋と農業を営んでいました。しかし、この祖父母は私が生まれる前に亡くなったので、私は彼ら二人のことを知りません。

父方の祖父は、カルフェルデ *Calwölde* の線路沿いのシュタントハウス・クライエンゼン *Standhaus Kreiensen* にいたのですが、その後これを買ったのです。昔は、村ではいつもテントの中でお祭りや祝い事をしていたのですが、私の祖父が初めて村にホールを建てました。

そして、祖父母が亡くなって、これを長男が相続しましたが、彼は結婚せず、独身でした。彼は、「いや、俺は自分の隠居生活分の金をもらおうよ」と主張し、それで次男が居酒屋を受け継ぎました。祖父の後妻は、争う気はなく、

居酒屋を与えてしまいました。

父のもうひとりの兄には子供がいませんでした。そこで、全てを売り払って、ブラウンシュヴァイクにやって来たのです。そして、ここブラウンシュヴァイクのグロトリアン&シュタインヴェーク・ピアノ *Grotrian & Steinweg Klavier* で働いていました。

私の父はもう亡くなっていたので、相続分が保管されることになりました。それで、私は自分が21歳になるまで、つまり1935年まで、(相続を)待たねばなりません。ある時、私は裁判所から呼び出しを受けました。いつも私にお金を渡すと約束していたこの叔父が、— この叔父は私の父より年上ではあるけど、長兄でも次兄でもなく、上から3番目の叔父なのですが、— とつぜん亡くなったのです。他の叔父たちは、そんな約束のことは知りませんでした。最年長の叔父は、彼の隠居生活分をもらって、安泰でしたし、いろいろ込み入った事情がありました。亡くなった叔父には、愛人がいて、その人とは結婚していなかったのですが、後にブラウンシュヴァイクと一緒に暮らしていました。そこで亡くなったのです。彼に子供はいませんでした。彼は遺書を書き残したのですが、亡くなった時点で、どのくらいの資産を残していたと思いますか。30,000マルクも残していたのですよ。彼は祖父の残したお金を大きな土地の取得に投資して、その土地に兵舎が建てられました。彼は至る所に不動産を所有していて、子供もいなかったわけです。そこで、私の妻の名前はとか、彼女の結婚前の名前はこうだったとか等々も含めて、とにかく書類を揃えるのが大変でした。そして、私たちが裁判所から出ると、2番目の叔父が「お前に言うておくことがある」と私に言いました。私が相続のことをうるさく言ったからなのでしょう。そこで私も「あんたは自分が卑劣だったということを知っているのかい？ あんたは、売った土地が父の相続分だということをよーく、知っているはずだ。相続は私の権利だから、要求して当然のことなのさ。」と言うと、それに対してすぐに叔父が「何を、お前も私が馬鹿だと思っているのか」などということを私に言ったものです。

4. 両親の家の住居

私は、ブラウンシュヴァイクで生まれて、ブラウンシュヴァイクで暮らす、生粋のブラウンシュヴァイク人です。クロイツ通り *Kreuzstraße* で生まれましたが、通りの番号はもう覚えていません。

この最初のクロイツ通りの住居は、普通の3部屋の住居でした。台所もありました。トイレはまだ中庭にありました。地下室もありました。屋根裏の物干場はありませんでした。住居の中には廊下はありませんでした。バス・ルームもありませんでした。とはいえ、贅沢な住居でした。私の姉と兄の2人は、父の戦死後は、よそにあずけられましたから、この家には住んでいませんでした。私より2歳上の姉は、父の戦死と同時に母方の祖父に引き取られたのです。1917年までは、私たち兄弟姉妹は、みな一緒に暮らしていました。1917年までは両親と子供5人の7人が、ここで暮らしていたのです。それが、1917年には姉が母方の祖父のもとに行ってしまいました。父方の祖父もここに住んでいたのですが、もうその当時は亡くなっていました。私の一番上の兄は1906年生まれです。彼は学校から田舎に送られて、カルフェルデの辺りの農家に行ったので、この兄ももう家にはいませんでした。だから、子供3人と母の4人で、この住居に住んでいました。この家には母子4人で住んでいて、他人も親戚も一緒に住んではいませんでした。

私が子供の頃のことで、まだよく覚えていることが一つあります。この家で、小さな居間から寝部屋へ行く境には、ドアはなくて、カーテンがありました。このカーテンを上あげて通り、また下へ戻すのです。朝、母が仕事へ行って、ほかの兄弟たちは学校へ行きました。それで私はまだベットにいました。そうしたら、このカーテン伝いにネズミが上に走っていくではありませんか。私は家中に響きわたるほどの大声で叫びました。「カイクス *Keims* の家のおばさん、僕をここから連れて行って、ここにネズミがいるよ」とね。そうしたら、彼女が「坊や、鍵を持ってないのよ」と言うではありませんか。この時から、私はもうたった一人であにることができなくなりました。私

が5歳の時のことです。それで母は私を仕事場に連れて行くことになりました。母の仕事場では、私は何時間も一人で石で遊んでいました。昔はおもちゃなど何もなかったのですが、家の中にいるよりはよかったです。

このクロイツ通りの家には1919年まで住んでいました。ちょうど戦争が終わったところでした。1919年には戦争は終わっていたのです。私の父が戦死した時、私たちの大家はちっぽけな商売をしていたのですが、その店を口実に私たちを追い出したのです。

それで、私たちは、飛行場に移ったのです。バラックの住居でした。プロイツェム *Broitzem* の飛行場です。私たちは1年間弱、そのバラックに住みました。この住居は、いわば飛行場の敷地内にありました。実際、バラックのような家で、住所も「飛行場プロイツェム」だけで、通りの名前も番地もありませんでした。ここに1919年から20年まで約1年間住みました。この家は、木でできたバラックで、平屋でしたが、地下がありました。そして外側はタールの屋根葺き用の資材で覆われていました。この家での最初で最後の冬は、とても厳しい冬を過ごしたものです。暖をとるために燃やす物がなかったのです。だから、家の壁板をはがして燃やしたものです。他に燃やす物がなかったのです。もう上の方からも雨で漏るところができました。雨が強く降ると、私たちは家の中で雨傘を広げなければなりません。屋根に隙間があったので、雨漏りがしたのです。このバラック建ての家の住居がどのくらいの大きさだったかなどは、ぜんぜん覚えていませんが、普通の寝室と普通の居間に台所もありました。だから、2部屋と台所付きの住居と言えます。トイレは中庭にありました。たくさんのバラックの長屋が一行に立ち並んでいました。長屋の中には何家族かが入っていて、そんなバラックが4～5棟、建っていました。ここには子供はそんなに多くはいなかったと思いますが、どんな人たちがここに住んでいたのかは、わかりません。しかし、あの町はずれは、すばらしかったです。私たちはいつも飛行場や格納庫の中で遊んでいました。昔は人がプロペラを手で回転させて、それでプロペラ機

が動き始めるのですが、私たちはその飛行機の後ろに立って見ていました。それに昔は羊の大きな群れが来たものです。この飛行場は戦争が勃発するまでは、あるいは戦争勃発の少し前までだったのかもしれませんが、民間のものでした。いずれにしても、30年代にナチが実権を握って、この飛行場が国に召し上げられたってわけです。つまり、ここに一種の工場を造ったのです。そしていろいろな付属施設もできて、戦争が終わるまでその状態が続きました。戦後は、しばらくの間は、また兵舎ができるまで、そのまま操業停止していました。今は、ふたたびがらんどうです。しかし、ナチが台頭するまでは民間のものでした。今はもう当時のバラックはありません。あのバラックはすぐに取り壊されたのです。しかし、あのバラックにも地下室がありました。姉と長兄が家を出ていましたから、このバラックの住居には、私の家族4人で住んでいました。この住居は、他の家族の住居からは独立していて、ここに私の家族だけで暮らしていたのです。この私たちの住居の中には、廊下はありませんでした。

その後、私たちはまたクロイツ通りに移ったのです。同じクロイツ通りでも、以前と同じ家ではありません。番地は覚えていますよ、86番の家でした。1920年にクロイツ通り86番に引っ越したわけです。つまり、3つ目の住居のクロイツ通り86番です。1920年から私は結婚する1939年までここに住んでいました。母は1953年に亡くなるまで、ここに住んでいました。

この住居の中には後から廊下がつくられました。この廊下は、多分、入居後10年くらいたってからつくられました。地下もありました。トイレは階段室でしたが、私たちの住居と同じ平面上の階段室にありました。下の階と私たちの階の中間の平面上ではありません。バス・ルームなんてとんでもない、もちろんありませんでした。台所はありましたが、納戸もありませんでした。家を出ていた姉と兄は、もう家に戻って来ることはありませんでした。もう一人の姉は14歳の時に、昔のいわゆる女中奉公に出ましたから、家を出ていました。だから、その後、この住居では、4歳上の兄、母、継父と私の4人

で暮らしました。ここには、部屋のまた貸しもしませんでしたし、祖父等も住んでおらず、私の家族だけで住んでいました。

その後、私は結婚して、1939年からは、マッシュローデ *Mascherode* の住居に引っ越し、そこでちょうど1年間、1940年まで暮らしました。そして1940年に現在の住居に越してきたのです。つまり、クロイツカンプ通り *Kreuzkampstraße* 24番に1940年に越してきたのです。この家は、新しく建てられた家でした。

5. 労働者居住地域の様相

「ニッケルンクルク」*'Nickelnkulk'* 「マウワーン通り」*'Mauernstraße'* 「ノイエ・クノッヘンハウアー通り」*'Neue Knochenhauerstraße'* などの通りは知っています。極端に言うと、すばらしい通りでした。昔は、「ニッケルンクルク、クリント *Klint*, ヴェルダー *Werder* はドイツを墮落させる一番の困り者だ」というのが、この地域についてのお定まりの文句でした。もちろん、この地域の住人がそう言ったのではなく、他の地域の住民がそう言っていたのです。

ナチスが政権を取ったときに、ナチスがこの辺りへやって来て、通りの明かりをすべて消してしまいました。

J夫人：こちら辺は、大部分が労働者の居住地域で、赤い労働者街だったのです。赤です。ムーケル *Mukel*, ニッケルンクルク, マウワーン通りです。当時、つまり1933年以前は、誰も党に入る勇気などありませんでした。戦後は、違いましたが。

しかし、ランゲ通り *Langestraße*, ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerkerstraße*, ヴェーバーン通り *Webernstraße*, ニッケルンクルクなどの家々は、まだ家の中に南京虫がいるような、本当に古い家ばかりでした。後に、これらの家々は修復されて、近代化されましたが、とにかくそこには、本当に貧乏人の中でも一番の貧乏人が住んでいたのです。ランゲ通りなどは、

ほとんどがそうだったけれど、どの家もみんな天井が低く、斜めに傾いていました。

6. 学校生活

私は6歳で、まず、ホーエシュティーク通り *Hohenstiegstraße* の小学校に入學し、1923年に飛行場から引っ越したので、ビュルガー通り *Bürgerstraße* の高等小学校に転校し、1928年に卒業しました。ぜんぶで8年間、学校に通い、その後、ビュッシング社で旋盤工の職業教育を受けました。この職業教育を1932年までの4年間受けました。

私は、飛行場の家から徒歩でホーエンシュティークの学校に通いましたが、まだよく覚えているのですが、当時は、あの木靴でした。粗末な皮が木の底の前側と上側についているものでした。それにすばらしい体操用の靴ももっていましたが、これはボール紙でつくられたものでした。ある日、ホーエンシュティークからの帰り道にもすごい雨が降りましたが、まだ当時は雨宿りする所などはありませんでした。そうするうちに私の木靴の前側の革ひもだけが残って、ぱたん、ぱたん教科書をみんな泥の中に落としてしまったことを覚えています。

私は、学校で叩かれたり、殴られることは、ごくまれにしかありませんでした。昔は、図工の教師がいつも物差しで叩いたし、音楽の教師もバイオリンの弓で生徒を叩いたと私の妻が話していましたが、時々でした。いつも引っ越しをしていた、悪ガキがいたのですが、授業をサボっていて、叩かれました。私は二つの学校に通いましたが、どちらでもお仕置きをされたことはありませんでした。2、3人の悪ガキの子供たちの間ではいつもケンカなどをしていましたが、特に困った問題が起こったことはありませんでした。学校で起こったいたずらの思い出というと、後に煉瓦工になった奴がいましたが、こいつがまったく乱暴な男でした。地理の授業の時に、掛けてあった地図のロールを下の方に引きおろして、それから教室の中を行進して歩いた

のです。そこで教師が「坐りなさい。練習問題をやるから」と言うと、坐るけど練習問題はしないよ。僕はどうせ5の成績なのだから」なんてことを言うのです。

その他に、職業学校でのおもしろいエピソードもいくつかあります。今でもまだあると思いますが、臭い爆弾というのがありました。教師が、いつもとても暴力的だったので、私たちは彼が好きではありませんでした。ある奴が、いくつかの臭い爆弾を持ってきて、書き物机の下に置きました。臭いのです。休み時間が終わって、教師がやって来ました。窓をすべて開けさせて、教室を出て行ってしまいました。20分後に又、教室にやって来ました。又、出て行ってしまいました。まあ、いずれにしても、それで授業をせずに45分は稼いだのです。そこで「やったぜ、うまく先生を追い出したぜ。45分間も。まだ練習問題をさせるかどうか見てみよう」と私たちは言い合いました。教師がどうしたかという、窓を閉めて、1時に終わると思っていたのですが、彼は「さて、45分間の遅れをこれから取り戻すよ」と言ったのです。だから、その後は、もう誰も同じいはずらはしませんでした。そうすることで、その教師は、その後は静かに授業ができたというわけです。

♪夫人：私たちはいろいろな糸くずを集めました。昔は、いつも手芸の女性教師がいたものですが、私たちの学校には、本当に典型的なオールドミス、歳をとった女性教師がいました。一人の生徒が、そっと彼女の後ろに近寄って行って、スカートの下の方に糸くずを付けたのです。長いスカートをはいていたのです。「まあ、誰がこんなことしたの？ 誰もしなかったって言うの？ そう！」みんなが疑わしかったのです。私はその年、成績表に3を付けられました。それで私は家で、お尻をこっぴどくひっぱたかれたものです。しかし、彼女にもっとも疑われた子は、4を付けられました。成績については、どうにもできませんでした。犯人は見つけられませんでした。学科担任教師が成績表に悪い点を付けても、親はこれに対して何もできません。私は3を付けられたけど、本当にやった生徒は成績のよい子で、教師はその子がやったとは思わなかったのです。彼女は、とうとう犯人を見つけることはで

きませんでした。

7. 子供時代の労働と遊び

私は、子供時代に、一度として金稼ぎのために働いたことはありません。家事の手伝いで、買い物のお使いに出るくらいはしました。「雑貨屋に行っておくれ」とか、「朝ご飯用に肉屋へ行っておくれ」とか母が言うと、私は走ってお使いに行きました。

その他には、皿洗いをして、母の手伝いをしました。私は末っ子でしたから。買い物のお使いに初めて出たのは、1920年に引っ越して、28年に見習い修行に出たのですから、1926年だったと思います。その時は、まず母と一緒に、買い物に行きました。皿洗いの手伝いは、私が学校を卒業してからですから、1928年から始めました。それ以前は、母がまだ仕事をしていたので、「そのままにしておいて。僕が洗うから」と言って、時々手伝ったりもしていました。家事仕事を主にしていたのは、母でした。

子供時代に自由に使えた時間は、他の子供より多かったというよりは、よその家の子供たちと同じくらいでした。学校がありましたし、学校の宿題もありました。だから、自由になる遊び時間が少ないと感じたことはありませんでした。外に出て遊ぶときは、昔は道路で遊んだものです。クロイツ通りに住んでいたときは、中庭で遊びました。中庭の後ろ側に大家が住んでいて、私たちがあまりに騒動をおこすので、彼に脅されて追い払われたりもしました。追い出されると道路に行ってお遊びました。公園などの遊び場所は近くにありませんでした。

私の住んでいた家には中年の夫婦者が住んでいて、私たちが家の中どころか、近くで遊んでいても、彼らはとても神経質だったのです。昔は子供たちはいつも通りで遊んだものです。通りでは、ラウンダーズ（野球に似たゲーム）Schlagball や「壁のそばに立っている」‘Stand an der Wand’、*「ミュラー、*

水はどのくらい深い、僕たちは水の中を渡って行くよ」*‘Müller wie tief ist das Wasser, wir gehen durch’*などの遊びをしました。そして私たちが大騒ぎをすると、大家が棒を持って出てきたのです。

飛行場に住んでいたときは、当時はまだ今のようにうるさく言われなかったので、飛行機が並んでいる時や、飛行機が出て行った直後の格納庫の中を見たりしました。あるいは、ちょうど羊飼いが羊をそこら辺に放している時に、羊飼いを訪ねたりしました。そこら辺は、草が生えていて、羊はいつもそこで草を食べていたのです。その草を食べるために、羊の群れがいつも放されていたのです。遊んでいた相手は、いつも近所の家の子供や学校が一緒の子供たちでした。その内の一人とはまだ今も付き合いっていますが、彼は、このリンク *Ring* に住んでいます。親戚に子供はいませんでしたから、親戚の子供たちとはここで一緒に遊んでいません。

その後引越したクロイツ通り 86 番、今はマリーエン通り *Mrienstraße* と呼ばれていますが、当時からそうでしたが、ここからフェルトマルク *Feldmark* へ続いていました。このマリーエン通り 7 番の左側だけが、宅地でした。その向かい側はアスパラガス畑でした。ここで、思う存分に暴れ回ったものです。

クロイツ通り 86 番に越したとき、私はすでに 1 年間、学校に通っていました。このころには、もう通りでは遊んでいませんでしたが、アスパラガス畑を荒らしたので、空気銃で脅されたことがありました。それで、その後は、その上の方に素敵な藪があったのですが、そこで木の上に砦を造りました。そこには果樹園もあったのですが、私たちは垣根を越えて、木に登り、りんごや梨を盗ってきました。もう、このころには通りでは遊びませんでした。

8. 親子関係

子供の時に両親と個人的な問題について、話し合ったことはありません。母ともそんな個人的な事について話したことは、まったくありませんし、継父とも一度として諍いなどはありませんでした。私が生意気なことを言ったりして、ちょっとビンタを張られるということさえありませんでした。母も私を叩いたりしたことはありませんでした。どうしてかというと、母はお茶会などに行ってくると、もう疲れてしまっていたからです。信じられないかもしれないけれど、何があっても、本当にそうだったのです。母が、ただ怒鳴るだけで片が付いたのです。母が私を怒鳴り散らすと、私はさっと逃げました。母はただもう疲れていたのです。一度だけですが、尻を数回、こっぴどく叩かれたことがあります。それは、私がクラス担任の先生を怒らせたときでした。それ以後は、両親から叩かれたことはありません。

両親の家ではお金が足りないなどということについては、子供のいるところで話しをしていました。大きな物を買うときにお金の話をしていました。子供たちがその場にいと、子供たちも話しの中に入りました。私は末っ子なので、大体は私がお場にいました。他の兄姉は、私の記憶する限り、その場にいませんでした。大きくなってからというわけではなく、小さいときからそうでした。買い物に行く時とか、継父からお金をもらわなければならない時に、そういう話になったものです。

9. 結婚

私たちは、1938年にスポーツ協会で知り合い、妻が23歳の時ですが、1939年12月9日に結婚しました。結婚前に半年ほどの婚約期間がありました。私たちはスポーツ協会で、もう長いこと知り合っていました。1939年6月から12月までの半年間、婚約していたわけです。婚約を申し込んだのは、私で

した。結婚しようと強く働きかけたのも私でした。私は一度しか結婚していませんし、妻以外の他の女性と婚約したこともありません。妻の名前はリーゼロッテ *Lieselotte*、旧姓はノヴァツキ *Nowacki* です。妻も 1916 年 6 月 18 日にブラウンシュヴァイクで生まれました。そして、ブラウンシュヴァイクで結婚したというわけです。私たちは、教会では結婚式をしていません。妻も結婚した時には教会から脱退していました。

結婚前の妻は、昼間の学校に通っていましたが、その後、フォイクトレンダー社 *Firma Voigtländer* に安い賃金で工場労働者として働きに行きました。結婚した時には、私には良い稼ぎがありましたので、結婚後、妻は働きませんでした。妻は 1932 年に働き始めて、1939 年に仕事をやめました。だから、フォイクトレンダー社で 7 年間、働いていたこととなります。1932 年以前は、彼女は家政学校に通っていましたが、仕事にはつかずに、この学校に通っているだけでした。彼女は、さらに上の学校に行きたかったのですが、家の事情であきらめたのです。家には 4 人の子供がいて、彼女の父親は鉄道の公務員でしたから、当時はそんなにたくさんの金を稼げなかったのです。そこで彼女は「私が働くわ」と言ったわけです。妻の母親は専業主婦で、一度として働いたことはありませんでした。アスパラガスの皮むきなどの臨時雇いの仕事などもしたことはありませんでした。ここブラウンシュヴァイクでは、ふつうは、奥さんたちが、季節によって臨時雇いの仕事をしますが、彼女はまったくそんな仕事もしたことはなかったのです。妻は結婚した当時、ヤーン通り 16 番の両親の家に住んでいました。

結婚後に、一時、両親の家に住み、その後、マッシュェローデに住居を借りて、独立して住みました。両親や義理の両親が所有する住居ではなく、大家に家賃を払っていました。

私たちには息子が一人います。マンフレット *Manfred* という名前で、1940 年 4 月 7 日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。妻は死産も流産もして

いません。マンフレットは普通の学校に通い、その後、機械組み立ての学校に行かせました。彼はそこで機械組み立てを学び、その後に電気を学び、さらに短期の専門学校教育を受けました。今は、ブラウンシュヴァイクのジーメンス社 *Siemens* で官庁関係課長です。私は彼に「お前はまず下から叩きあげて、手仕事がどんなものかおぼえるのだよ。」と言って、学校に送り出したものです。

10. 性・避妊・妊娠中絶

〈性〉

性については、堅信礼の時か何かの折りに一度、母が部分的にですが、子供がどうしてできるかとか、男女と一緒に暮らすということについて話してくれました。私が12、3歳の頃のことです。その時、母が肋膜炎になり、誰かが湿布をしてあげなければなりませんでしたが。しかし、家には私一人しかいなかったもので、母が、「坊や、湿布をしておくれ」と言ったのですが、それがきっかけで性に関する話をしてくれました。部分的にというのは、つまり、最初は母に、それから堅信礼用の授業で説明を受けたということです。

〈避妊〉

性については少しずつ知識を得ましたが、前に話したように堅信礼の授業で教わりました。しかし、避妊については教わりませんでした。その後、友人たちや本などで知ったのです。男の友人たちです。私たちの頃は、女の子たちとはそういうことは話しませんでした。今は、学校も共学だし、めちゃくちゃですけれどもね。避妊について知ったのは、学校を出てからです。

母と継父は子供をつくりませんでした。私は両親の避妊方法については知りません。どういう風にして避妊していたのかは本当に知りません。そのことについて話しはしませんでした。この種類のことは、家ではまったく何も話されなかったのです。母が私に性教育をしたにもかかわらず、ぜんぜん

話されなかったのです。どんな避妊具があるなどということも話されませんでした。

〈妊娠中絶〉

1930年以前に、近所で中絶があったなどというような事を聞いたことはありません。

J夫人：私たちの時代には、そういったことはまだ「流行」していませんでした。そういうようなことは、何かの機会に知るのですが、直接、世間に知られることはありませんでした。私が知っているのは、昔、ドクター・ヴィレ *Dr. Wille* という人がいて、彼は、すでに4、5人の子供のいる女性を助けていたということです。彼は本当の労働者の味方の医者だったのです。彼はブラウンシュヴァイクにいました。

それからプライマン *Breymann* さんもいました。私たちの家にも、すでに4人の子供がいたのですが「もう産まない方がよいでしょう。私が手術をしましょう。」ということでした。彼女は女医で、本当の労働者の味方の医者でした。お金を持っている人たちには、そんなことは不要でしたよ。

私はまだ覚えているのですが、あの頃、しかも彼女が家に来て、ほとんどの場合が家でやったのです。「がっしりとした机を！」と彼女が言いました。掻爬するためにですよ。そうこうしている間に終わりました。私が12歳の時でした。子供はいつでも好奇心が強いものですから、「あっちへ行きなさい！」と言われても、何とか見ようとするのですよ。のぞき見していたのが見つかって、ビンタを食らいました。そして、「よその人に言っちゃあいけないよ。」と言われました。

ここのノルテさん *Nolte* は有名でした。彼は婦人科医でしたが、何度か監獄にぶち込まれました。ノルテという名前でした。彼はまだ生きています。彼もブラウンシュヴァイク人です。彼は何度も中絶のために刑務所に入っていたのです。

11. 職業生活

私は、1928年に高等小学校を卒業して、ビュッシング社で旋盤工の職業教育を受けました。この職業教育を1932年までの4年間、受けました。私は、1932年に半年間、失業していました。1932年は、大失業の年でした。4月から8月末まで、失業していたのです。失業中は失業手当を受けていました。半年だけでしたし、問題はありませんでした。私はちょうど境界線上にいたので、失業手当の申請書を出さなければなりません。最初は手当を出さないということだったからです。

私の父は、1917年に戦死しました。それで母は19年に再婚しました。子供は5人いて、私は末っ子だったので、失業手当を拒否されたのです。それで私は、いつから継父にその継息子を養う義務が生じたのかということを書いて、申請書を出したのです。そうすると、手当が出されるようになりました。そして、まもなくビュッシング社でふたたび仕事を始めることになりました。当時は、それは大変な名誉でした。あの大きな工場で、当時はたったの840人しかいなかったのですから。そこで私は「けしからぬことだ。独身者が働いていて、3人も子供のいる妻帯者が家にひきこもっていなければならないなんて」というような意地悪を言われたものです。「本当に気の毒なことだが、私は家族や年よりたちのことを考慮する事はできないのだよ。ここの限られた数の人員配置の中で、何でもできて、私が頼りにできる者が必要なのだ。」とマイスターが言いましたよ。しかも、会社から学校に通わせてもらったのですからねえ。

12. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

<宗教>

堅信礼は1928年3月28日に受けました。私の兄姉たちもみな堅信礼を受けています。

〈政党〉

両親の家では政治について議論などはしませんでした。ぜんぜん話しませんでした。

両親の家では新聞を2種類、購読していました。ひとつは、『ブラウンシュヴァイガー・アルゲマイナー』‘*Braunschweiger Allgemeiner*’, それに『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’ですが、これは継父が読みたがったのです。継父は『フォルクスフロイント』を好んで読みました。これは城の近くで印刷されていました。実際には、党の機関誌でした。SPD のです。彼は一度として社民党に入っていたことはないにもかかわらずです。私も両親の家では、1930年まで『フォルクスフロイント』を読んでいました。

両親が特にどんな人物を評価していたかについては知りませんし、私自身も特に評価する人物はいませんでした。私は政党に属したことはありません。社会民主党 SPD にも属したことはありません。

〈労働組合〉

私はドイツ金属労働者同盟 *Deutscher Metallarbeiter-Verband* に属していました。1928年に加入し、33年までいたのですが、禁止になったのです。その後、戦後にまた金属産業労働組合 *IG-Metall* に加入しました。

金属労働者同盟に加入した理由は単純で、正直言って、ピュッシングの工場では全員が加入していたからです。それに当時は、労働運動は盛んでした。つまり「おおっ、おまえも加入できるよ」と言われて、「そうだろうとも、加入できない理由はないよ」という風に話が進みました。私の父からの影響はありませんでした。母からはそんな影響なんてことは期待できませんでした。

そのうちにナチが実権を握って、みんなを押しえつけ始めたのです。ナチが労働戦線を創設する前の移行期には、ナチが *NSBO* (: *Nationalsozialistische Betriebszellenorganisation* 国家社会主義企業細胞組織の略称。 *NSDAP*: *Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei* 国家社会主義ドイツ労働者党の企業内組織で、1933年月2日にヒットラーに禁止された自由労働

組合の代わりに設立された)の同僚を送ってよこしました。その男が私の処に来て、NSBOに勧誘しました。それで私は、「私はまだ君たちに回答できないよ」と答えました。家に帰って、母と話したところ — 継父とはそういうことについて話すことができませんでした — 母は「そんな曖昧な言い方をしたら、あとからイエスと言ったということになるよ」と言いました。数日後になって、また彼が来て「さて、よく考えてみたかい？」と訊かれたので、「考えたとも。……おれは加入しないよ。さあ、おれを追い出すつもりなら、追い出してみろよ」と言ってやったのですが、彼らは私を追い出しませんでした。私たちがその後ナチの労働戦線 *Arbeiterfront* に入るまでは何もしていませんでした。この労働戦線に入ったのは、ある男の同僚の影響でした。ビュッシング社では、事務所にしか女の同僚はいませんでした。製品管理部にも女性従業員はいませんでした。

私の妻も39年に結婚するまでは労働組合に入っていました。しかし、役員などはしていませんでした。

J夫人：私は、結婚前にヤーン通りに長らく住んでいましたが、あの通りの家々は1912年に建てられものでした。ヤーン通りの家々は、住宅組合が建てたので、みんな住宅組合の建物でした。だから、ナチスは住んでいませんでした。キルヒホーフ通り *Kirchhofstraße* の家々も住宅組合の建物でした。1933年以前であっても、労働者の間にもたくさんのナチ党員がいました。失業もあったからで、ナチの連中は、失業者を説得して入党させたりしたのです。いや、ナチの狂信者さえもいたのです。33年以前もいました。本当にものすごい狂信者がいたのです。本当に。昔、ライヒスバンナーだったのに、ナチの権力把握の直前に、まったく180度反対側に方向転回した者がいました。

たとえば、私の父は鉄道で働いていたのですが、彼は古手のSPD党員として知られていました。そこに、ブリュニングの緊急命令がでたのです。それはつまり、「公務員たちよ、お前たちは自由意志によって寄付をしなければならない」ということでした。冬季援護団体などに寄付をしろということでした。

そこで父は、「私自身、4人の子供がいます」と言いました。ブリュニングの緊急命令といったところで、私は失業していましたし、長兄も失業していました。それに私たちの家にはまだ幼い弟妹がいました。「そうかね。しかし、君はSPDには毎月、党費を払っているじゃないか」と父の上司が言いました。そこで、「私が払った党費は30ペニヒばかりです。私が持っている金を数えてみてください」と父が言っても、しつこく寄付を迫られたのです。父が役所などに行かなくてはならない時など、本当にしつこく嫌がらせをされたものです。

〈帰属意識〉

正直言って、私はいつも上を目指して努力していました。だから、学校にも行ったのです。社会的にもう少し上に昇ろう、最下層のグループにだけはなるまいと思っていました。いつもそういう意識で生きてきたのです。機械組立工になるまでに、旋盤工として一生懸命に働きました。そこでまず機械調整者になり、その後は職長になりましたが、さらに機械組み立ての教育を受けました。私はいつも上を目指す人間だったのです。

1930年代に私が社会的に属していた階層は、中産階級です。労働者階級ではありません。

13. 祝い事・余暇

〈祝い事〉

祝い事といえば、誕生日です。それにクリスマスや復活祭に、聖霊降臨祭も祝いました。両親の誕生日もお祝いしました。祝い事で一番嬉しかったのは、クリスマスでした。祝い事といえば、それだけです。

大晦日には、両親は遊びに外出しました。しかし、元日は家にいました。5月1日のメーデーには、ティンマラーアー・ブッシュ *Timmerlaher Busch* で催されたお祭りにも行きました。他の政党のお祭りには行きませんでした。

少し大きくなって、青年期には、クリスマスにはいつも旅行をしました。聖夜には両親のために家にいましたが、その時には汽車の切符をポケットに持っていて、翌日の早朝には出発していました。私はいつもクリスマスから新年にかけては働かなくても良かったので、新年まで時間があったのです。その時によって、ドレスデン *Dresden* とか、何処かに行っていました。いつもクリスマスと新年の間に旅行したものです。それは、いわば、夏の休暇の後の2度目の休暇でした。

〈余暇〉

両親は、いわゆるクラブに入っていました。彼らは、いつもあちこちのクラブに行っていました。母は、水曜日には定期的に、昔は、お茶の会と言っていました。多分、そんな会に行っていたようです。仲間の奥さん方が集まって、コーヒーを飲んでいたので。私の家にも彼女のお茶仲間の婦人たちがやって来ました。いつも回り持ちで、それぞれの家で集まって、お茶をしていたのです。当時、4人か5人、仲間の奥さんたちがいて、今週はこちらの家で、次の週はあちらの家で集まるという風でした。彼女たちは、もちろん、自分で焼いたケーキを持ち寄って、当番の家ではコーヒーを提供するだけという風でした。週のちょうど真ん中の日にこの集まりがあって、その他の週日には仕事をしていました。そして、日曜日にも、このクラブの集まりがありました。このクラブというのは、知人などが集まってできたものでした。日曜日毎に、ある晩は私たちの家、それから次はあちらの家、そして又、あちらの家と順繰りに回って集まっていたのです。これらの知人たちはブラウンシュヴァイク中に散らばって、住んでいました。母と継父が結婚して、初めの頃は、継父は、いつも一緒にこのクラブに出ていたのですが、そのうちに継父は金曜日毎に定期的にスカート（3人でするトランプゲーム）をしに出かけるようになりました。

1928年頃のことだったと思います。私が学校から帰る頃には、彼らはもう居酒屋で集まっていたものです。当時、足場の組立をやっていたシュトゥー

ビツヒさん *Stübig* や肉屋のブラッグさん *Plagge* などです。今ではみんな亡くなってしまうましたが、毎週金曜日の晩にスカートをする仲間たちでした。彼らは、居酒屋でスカートをしていたのです。

両親のクラブやお茶の会の仲間たちは、職場の同僚ではなく、みんな友人や知人関係でした。友人の誰かがその友人を連れてきて、その人が仲間に加わったという風で、輪がだんだん大きくなったものです。

ツェラー通り *Cellerstraße* のツェラー・エッケ '*Celler Ecke*' へよく行っていましたが、これは普通の居酒屋でした。一度、私も両親とそこへ行きました。他にも一度、昔、両親と一緒に「ダンネス・ホテル」 '*Danne's Hotel*' と呼ばれていたところへ行って、ものすごい食事をご馳走になったことがあります。これは、軍人協会のレストランです。継父は軍人協会の会員ではなかったのですが、そこの誰かを知っていたので、招待されて、私も一緒に連れて行ってもらったのです。他には両親がどんな所へ行っていたのかは、わかりません。継父が週日の晩や、金曜日毎に他にどこでスカートをしていたのは、わかりませんが、彼らが、日曜日に私の家の庭でスカートをしていたことを覚えています。

私の両親に余暇が少なかったとは思いません。私は両親と一緒に、時々、遠足にも行きました。私たちが行った所は、一度はハルツ地方 *Harz* に、それに郊外のクヴェルマー・ホルツ *Querumer Holz* にも行きました。昔は、そこも今とはまったく違っていました。私たちの住んでいたクロイツ通りの近くに、ティンマラーアー・ブッシュという林があったのですが、そこには5月1日のメーデーの日だけでしたが、行きました。昔は、メーデーの日のお祭りには、ビール瓶を持って行きました。肉屋がいろいろな物を挟んだパンを売りにきていました。それに美味しい肉団子を挟んだパンもありましたよ。その他にも何やかやと売りたい物を持ってきていました。子供たちは、炭酸飲料水などを買ってもらいました。それから、私たちは一度、ゾフィーエンタル *Sophiental* に蒸気船に乗って行ったことがあります。この蒸気船は「ブ

ルノニア「*Brunonia*」という名前でした。この蒸気船はビュルガーパーク(市民公園) *Bürgerpark* から出発しました。この蒸気船がビュルガーパークに入ってくると、そこに船着き場があります。私たちはよくそこに行ったものです。この蒸気船はいつも鉄道のプールのそばを通りました。そうすると、泳いでいる人がいるので、何度もベルを鳴らしました。ある晴れた日に「ブルトニア」が沈没しました。そして圧巻なのが、翌日の新聞記事です。つまり「豪胆な船長の処置で乗組員は助かった」というものですが、何が起こったかという、蒸気船には、昔、小さな火焚き窯があったのですが、これが爆発したのです。それで、客や乗組員が右に左にと川に飛び込んだのですが、膝小僧の深さしかない河に飛び込んだのですよ。滑稽ですよ。 「豪胆な船長の処置で乗組員は助かった」ですからねえ。

両親は、二人だけで遠足をしたこともあります。射撃クラブの会員たちと一緒に出かけたり、又、ある時は、ハイデルベルクに住んでいた母の姉のところ、8日間とか14日間も滞在しました。その時は、私の長姉が私たち姉妹の面倒を見なければなりませんでした。

私が両親の家を出てからは、戦争があったので、遠足どころではありませんでした。

私が見習いだった頃は、余暇にはスポーツ協会で活動していました。夏には陸上競技をしました。それに夏には、ハンドボールやファウストボール *Faustball* (2mの高さに張った網越しにボールをこぶしで打ち合う5人制の球技) もしました。そして時々仲間とプールで落ち合ったりもしました。それは鉄道のプールで、古い方の駅にありました。そこで私たち仲間は落ち合っていました。私たちはいつも夏中有効のパスを持っていました。仲間にはものすごい跳び込み選手がいました。彼はものすごく上手だったのです。彼は、跳び込みの練習をして少年時代を過ごしました。しかし、私たちは労働者青年運動の中でスポーツをしたわけではないのです。

私は、妻とこのスポーツ協会でも知り合いました。私の妻は、以前は他のス

スポーツ協会にいたのですが、その協会がもうやっていけなくなったので、私たちの協会に移ってきたというわけです。それは1930年代の、ナチの時代のことなので、私たちは団結していました。こういう事情から私たちは知り合い、その時から私たちは一緒なのです。

このスポーツ協会は、職人によって創立されたもので、当時は、職人協会 *Handwerker Verein* が、HV と短縮して呼ばれていました。この協会は、ブラウンシュヴァイクの、ちょうどこの私の家の後ろの方角にある、エヒテン通り *Echtenstraße* に運動場を持っていたのです。この協会に、私は10歳の時から入っていました。そして後に、20年か25年前だったと思いますが、この協会は、TURA 体操・芝スポーツ *Turn- und Rasensport* という名前に変わったのですが、1930年代はずっと職人協会という名前でした。10年前の、1970年まで、私はこの協会に在籍していました。

私は他には演劇協会にも合唱協会にも入っていたことはありませんが、劇場の定期公演の鑑賞会員にはなっていました。